



# 真城子

家永三郎

文和書房

真城子

昭和四七年二月一日◎日 初版発行  
昭和四七年二月二〇日 再版発行

定価 六五〇円

著者 家永三郎

発行者 川上和秀

発行所 株式会社文和書房

東京都文京区小石川三丁目一三  
電話 東京八一三二六五四一  
振替 東京一一六六四九

印刷 中央精版印刷株式会社  
製本 中央精版印刷株式会社  
装幀者 片岡真太郎

真  
城  
子

經きやうに言いわく、「高原こうげんの陸地りくじには蓮華ねんげを生しやうぜず、  
卑湿ひしちの淤泥ぬでいにいまし蓮華ねんげを生しやうず」と。

——親鸞しんらん『教行信証』証卷しやうまきより——

同じ日本思想史を研究している仲間の一学究が、思いがけなく持病がにわか悪化して世を去ったが、遺族から依頼されて遺された蔵書や原稿の類いを整理していると、わら半紙八十枚ばかりにぎっしりと書きこまれた草稿が現われた。この人が生涯にわたり発表し続けた学術論文でも時事評論でもない。一番上の紙に「作創真城子」という外題びだが書かれていた。

職業作家でない人々で和歌や俳句を作る例は珍しくないが、本業を別にもちながら作家としても一家をなしている人たちは別として、作家でないのに筆のすさびに小説を書くという例は、遠い平安朝の昔に朝廷に仕えた貴族や宮女が試みたことは知られているけれど、現代ではあまり例が多くない。しかし、チャーチル会などのように、画家でない別の職業の人たちが、りっぱな絵画作品を画いて展覧会を開いたりするのを考えれば、職業的作家でないからとて小

説を書いておかしいはずはないのではなからうか。本業のひまひまに短い時間を活用して作れる和歌や俳句と違って、小説を書くのは容易でないまでのことで、和歌や俳句のような短詩形のジャンルに盛りきれない内容を表現したいという意欲をもつ人が、小説とか戯曲とかのジャンルを選んで筆をとったとて、別に怪しむにあたらないだろう。

もっとも、今言ったのは、一般論にすぎない。現実はこの原稿を読んでみると、普通の小説のようなディテイルの描写があちこちに散見するだけで、全体はむしろ予定した長篇の梗概を書きとめたに終わったように感じられる。しかし、いかにも素人くさい稚拙なディテイル描写の部分よりも、筋書めいた部分のほうにかえて取り柄があるような気もする。そして、そうした部分には、西洋流の文芸のジャンルの訳名からきた「小説」と名づけるよりも、日本の伝統的な文芸のジャンルである「物語」のスタイルを思わせるものがある。あるいは故人は、古事記以来の日本固有の文芸形態である物語の語り口を念頭においてこの一篇を書いたのだが、それだけでは骨ばかりの筋書になってしまっておそれがあるのでは、部分的にディテイル描写を試みたのかもしれない。とにかく、職業的作家の作品ではないし、作品などと呼ぶに値するかどうかさえ疑問であるが、これだけの草稿を書いてひそかにしまっておいた故人の気持を付度する

と、表現したいという意欲があつて積極的に筆をとつた文章であることだけはまちがいないと認められるから、既成の文芸作品のわくにはまるかどうかは問題でないと考え、たまたま公表の機会に恵まれたのを幸いに、遺族の同意を得てこのような形で活字にしてみた。

原稿は、紙質の粗悪なわら半紙に歴史的仮名づかいで書かれており、それから推すと、故人が現行仮名づかいの採用にふみきつた昭和三十年前後頃より以前の、おそらく良質の用紙が豊富に生産されていなかった敗戦後七、八年頃の時期に書かれたもののように、故人のその後の思想や学問の展開以前の心境で書かれていると認められるが、故人がこの世に遺した唯一つの「創作」であるとするれば、必ずしも故人の到着した最後の境地を表現したものでなくても別に不都合はないと考え、公表することとした次第である。ただし、歴史的仮名づかいは、読者の通読の便宜を慮<sup>おもんばか</sup>つて全部現行仮名づかに書き改めることとした。

原文にかような手入れをすることは、あるいは故人の意にそわないところもあるかもしれないが、最近では古典的作品さえ現行仮名づかに書き改めて刊行されていることであり、おそらく故人もやむをえない措置として許してくれることと信じる。

作中に年紀を明記したところは一か所もないが、内容を見れば、大正末年頃から昭和十年代



初頭までの時期を背景として叙述されていることが明白である。もちろん歴史小説ではなく、近松門左衛門の言う「実と虚との皮膜ひまくの間にあるもの」として読むべきであろう。

暖い内海の正月、春はすでにほころびていたが、数日來の曇天が急激に生じた冷氣を受けて、綿のような雪が地上を埋めていった。はじめのうちは地に落ちればすぐにとけてしまふほどのやわらかい雪であったが、氣温の下るにつれて地上はみるみる真白に埋もれて、人口十八万のK市は、生垣の並ぶ住宅街も、品物は貧弱ながら店がまえたけはハイカラなメインストリート<sup>1</sup>の商店街も、みな一様に銀世界と變つていった。

その頃ではまだ珍しい洋服を着た小学校上級の女の子が、真赤なオーバーを着て、和服の上<sup>2</sup>にマントを着た友達と、学校の正月元日の式の帰り途を、楽しげに語りあいつつ、いそいそと歩いてくる。かわいらしいこの二人を、道行く人は、つれをかえりみて微笑<sup>3</sup>みながら見やるの

であった。女兒の一人はK市の市長舟越千尋ふなごしちひらの一人娘真城子まきこであり、いま一人はその親友柏木千鶴子ちずこであった。

その頃の義務教育は尋常小学校六年までで、二人はまもなく三月に師範学校附属の小学校尋常科を卒業するのであるが、それにひきつづく高等女学校への入学の希望を語りあっていたのである。当時、尋常小学校をおえると、大部分が二年制の高等小学校に進み、そこをおえて社会に出るか、あるいはそこへも行けないですぐに実社会に出て働いていたのであって、中学校、男子ならば五年制の中学校、女子ならば五年または四年制の高等女学校などに進学できたのは、義務教育をおえた人々のうち、せいぜい十何パーセントにすぎない、ごく恵まれた家庭の子女に限られていた。

真城子とちがって、家計の豊かでない小学校の教師の、しかも義理の娘である千鶴子が女学校を志望することには、経済的にも家庭的にも問題があつたが、理解ある継父は彼女にこころよく志願を許してくれたのである。もっとも女学校に入学するには入学試験という関門があるが、有り余る才分の持主である真城子にとってそれは問題ではなかったし、体は弱いけれど成績のよい千鶴子にとっても目的をばむほどの難関とは感じられなかったに相違ない。希望に

燃える二人の頬は、寒さのためにかえって赤く輝いた。目のばっちりした、鼻すじのよく通った、成人したらさぞ美貌の人となるであろうと思われる真城子、やせぎすでいくらか頬がこけた感はあるが清純な顔だちの千鶴子。「あれが市長さんのお嬢さんよ」と、道行く婦人のささやきかわす声もれる。

門松と雪とにかざられた正月の町は、この幸福そうなかわいい通行人の、わけても真城子の潑瀾とした赤いオーバー姿を点出することによって、いっそういきいきとした新しい生命にみたされた観があるのであった。

雪のやんだ二日の朝、まばゆい太陽の光に雪が映えて、町々は明るく輝いた。安藤広重の錦絵風景版画に好んで画かれたように、「雪のあした」の明るさは、この国の風景の中でも、とりわけ美しいものの一つである。

きょうは、長いたもとの晴衣にお太鼓の帯をしめてもらった真城子が、書生を相手に羽根をついていた。門前を近隣に住む予備役の陸軍中将が、前立まえたての白い羽根をかざった正装で通行する。師団司令部の在郷将校の祝賀のつどいからの帰り途である。真城子の目に、昨年学校からの団体参加で陸軍初の観兵式かんへいしきを見た時の印象がよみがえった。

第一装の軍服を着けた歩兵部隊の整然とした隊列の前を、参謀肩章の金モールをきらびやかに胸にかざった参謀長以下の随員を従え、悠々と閲兵して行く師団長の乗馬姿。指揮刀をさつと右斜にふり下す将校と捧げ銃する兵卒との敬礼を受けて閲兵する乗馬の一群が通り過ぎる。やがて始まる分列行進。肩に四十五度の角度でになわれた着け剣銃の剣尖が、午前の太陽の光を反射してきらきらと光る。制服集団が形づくる幾何学的な立体構造の美とその一糸乱れぬ集団行進の律動美とは、その集団が日常において営んでいる苛酷な訓練、内務班での非人間的な私的制裁、個性の完全な圧殺、極端な階級差別等の実態をよく知らない多くの一般「地方人」には、ただただみごとになスペクタクルとしてのみ映じたであらうし、幼い真城子が、観兵式の「美観」から芸術的感覚に一種の刺戟を与えられたとしても、無理はなかった。それが人間集団を非人間的集団に画一的に転化させるための巧妙な心理装置の現われであることなど、幼い女の子にわかるはずもなかった。

ところが、のちに女学生になってから、真城子は、真夏の往来で、行進途上、銃を組み合せ立てかけて休憩中の汗くさい兵隊に野卑なからかいの声をかけられ、それ以来、軍隊がきらいになった。さらにまた、偶然通りかかった練兵場で、へまをやったのであろうか、新兵らしい

兵隊が下士官から顔がはれあがるにちがいないと思われるほどに猛烈なビンタをあびせられるのを見て、真城子には軍隊というものが世の中でもっともいとわしい、醜悪な存在と考えられるようになった。感じやすい乙女心に直覚的な反軍思想の芽が植えつけられたのである。しかし、それはもちろん少女の感性的な反応にすぎず、理論的な反軍思想といったものではなかったから、そういういとわしい見聞をへたのちも、幼い頃の観兵式や中將の正装姿を思い出すと、軍人もいつも正装をして、観兵式だけやっていれば、ちょっといいものね、といった感想のわいてくるのを否めなかった。それほどに幼い真城子の目は、中將の、子供のおもちゃのようにつばい勲章を胸にかざった、きらびやかな姿に惹きつけられたのであるが、それもつかの間、彼女はふたたび羽根つきの遊びに心を奪われてしまうのであった。

## 二

やがて卒業の日がきた。卒業式を終り、女学校への入学の許可も通知されて肩の軽くなった真城子は、いっしょに入学の目的を達した千鶴子とつれだって郊外へ出た。

市街地の尽きたところに田園が広がり、この国の中心部をつらねる幹線の鉄道線路が走っていた。線路の近くまでくるともう町の家並は切れ、畑の中に一段高く堤のように鐵路が築かれ、それにそって、げんげ、つくし、たんぼぼなどに彩られた細路があった。弥生の空はうららかに菜種畑の上を舞う白い蝶を眺めながら、この道を歩む二人の足は軽かった。

列車が二人の頭上を地響をたてて通り過ぎた。二人は何とはなしに手をふって、黒煙をのこなしながら走り去る列車を見送るのであった。日光にきらめきながら遠く彼方に消えていく二条の鐵路は、さながら自分たちのはるかな将来を思わせるようで、その彼方に、遠い、まだ見ぬあこがれの世界が横たわっているような気がしたのである。

上り列車の行き着く終点には、首都の東京がある。「女学校にはいたら、一度東京へつれて行ってあげましょうね」と、真城子は母親から約束されていたのである。まだ見ぬ東京の市の中にぎわいを想像しながら、真城子の将来に対する数々の希望の夢がくりひろげられていくのであった。楽しい結婚生活を想像するにはあまりにいとけない彼女であったが、何となく胸のときめく幸福が正体の知れぬままに前途に横たわっているのを感じないではいられなかった。

「あら、何を考えてらっしゃるの」

千鶴子に促されて我にかえった真城子の頭上を、ひばりが声高く舞いあがっていった。

次の日もよく晴れた朝であった。東向きの自分の部屋の寢床でふと目をさました真城子は、父母の会話が廊下をへだてた茶の間のふすま越しにもれてくるのを、なかば夢現ゆめうつで聞いている。はじめはよく醒めやらぬ頭の中は春霞はるがすみがちこめたようにほんやりとして、父母の声だけが別世界のできごとのようにその霞の中からこころよく鼓膜を刺戟するのみであったが、会話が、

「真城子も女学校には入れたのですから、約束どおり東京につれて行ってやりましょうよ」

「そうだね。私もだいぶ用事がたまっている。どうだね、ひとつ三人で出かけようか」

というところまでできたとき、真城子のまぶたはひとりでに開かれた。朝日がうらうらと障子窓にさして、雀のさえずる声が聞える。ちらと鳥影が障子の白いスクリーンを斜に横切った。

東京——急行列車で十五時間もかかる、八百キロのかなたにあるまだ見ぬ大都会。絵はがきや地理の教科書のさし絵でしか見たことのない東京の市街の光景は、想像するだけでも胸のおどる夢の世界であったが、その東京へ行ける！ 長い間の望みの達せられようとするよろこび



に元氣よく身を起した真城子は、いそいそと朝の身じたくを始めた。

真城子は美しい容姿と健康で均整のとれた肢体と豊かな天分と明朗な性格とに恵まれ、精神的にも経済的にも誰からもうらやまられずにいられない環境のうちに、すくすくと伸びていった。父の千尋は、M銀行のK支店長を永らく勤めたのち、K市に住みついて町の有力者の一人となり、やがて推されて市長となったのである。理財の業に服し、地方政治の衝にあたりながら、千尋はそうした経歴の人でありがちな顔役型の手腕家ではなく、見識の高い知識人であり、近代的な思想の持主であった。地方の小都市に住み劇職にありながら、彼は洋書専門で名高い東京のM商会のカタログにいつも目をさらし、海外の新刊書を注文して世界の最新の動向を的確につかむ努力を怠らないような人物であった。子供を明るくのびのびと、しかも聡明に育てあげたいというのが、彼の家庭における理想であった。母の弓子もまた明るい性格の、社交的な賢夫人であった。真城子は学才を父から、社交性を母から、知性と明朗さとをその両方から受けていたのである。

千尋は市長などになるには少しく書齋人型の性格であったけれど、弓子の社交面における内助がそのたらない点を十分に補った。千尋の世間的名声は、なかば弓子の功に帰せられるべき